

特別寄稿

丸山眞男と文人たちとの交流

土 合 文 夫

1. はじめに

『丸山眞男集』や『丸山眞男座談』の目次、あるいは『丸山眞男書簡集』に収められた書簡の宛名人を眺めて気付かされることの一つは、丸山眞男が多くの文学者たちと深い交流を持っていたという事実である。丸山が政治学者であるとともに、人文の領域に接すると言ってもよい「政治思想家」であったことを考え合わせても、丸山の文人たちとの長期にわたる親密な関係には通例の「政治学者」からは想像しにくいものがあると言つてよからう。

筆者は政治学にも政治思想史に対しても門外漢であり、丸山の仕事の本体を論評する資格や能力を持つ者ではないが、丸山と文学者たちとの交流を見ることによって、少なくとも、丸山の学問が生み出された人間関係の風土の一端を窺えるのではないかという思いがあった。また、機会を得て丸山の残した膨大な楽譜群の調査を一年半余り担当

したなかで、丸山の音楽に寄せる尋常ではないほどの強い思いの基底にあるものは何なのか、という大きな問いが残り、この二つがどこかで通底するのではないかと考えて今回の報告に至った。

2. 丸山の文学者たちとの交流

丸山と交流のあつた数多い文学者たちの中から、特に親交が深かったと思われる五人を選び、彼らが残した著作を通して垣間見られる丸山との交流の一端を紹介する。

武田泰淳（一九二一—一九七六）、竹内好（一九二〇—一九七七）、埴谷雄高（一九〇九—一九七七）

エッセイストとして知られた泰淳夫人武田百合子の旅行記『犬が星見た―ロシア旅行記』の中に、丸山眞男の名前と「幻」（？）が一か所

だけ現われる。場所は、ロシアからの帰路、日本行き飛行機に搭乗するために数日滞在したストックホルム市内のチボリという名の遊園。

池の向う岸を、くつきりした横顔の紳士が落ち着いた足取りで通って行く。

竹内「大学の先生じゃないかな」

私「丸山〔真男〕さんに似ている……」

竹内さんと主人は丸山さんのことを話しはじめた。それからしばらくと丸山さんの話をしていた。

「丸山はいまごろどうしているかな……。俺はいまビール飲んでいい気持だ。ああ、いい気持」主人は自分と竹内さんのコップにビールをついだ。キャッキヤツと笑声をあげて「俺もいい気持」と竹内さんが言った。二人でまたすーっとビールを飲み干していた。⁽²⁾

丸山自身が登場するわけでもなく、何らかのコメントが付されているわけでもない単なる情景のスケッチでありながら、武田、竹内と丸山の隔意のない親交ぶりが自ずから浮かび上がってくるような印象的な一節である。ちなみに、武田百合子の著作には、この箇所以外に丸山に対する言及はない。

武田泰淳の学生時代からの親友・盟友である竹内好と丸山との親交については、社会思想家として丸山の仕事と相渉の部分が少なかったことや、六〇年安保闘争を共に思想面から指導したという事情もあり、比較的良好に知られている事実と思われるが、原稿執筆のために缶詰にされていた熱海の岩波家の別荘で知り合ったという武田泰淳との親交ぶりについては、『丸山真男集』に武田への感動的な弔辞をはじめ、武田に関する文章が何篇も収められているにもかかわらず、言及されることが多くはないのではなからうか。

丸山、竹内、それに埴谷雄高を加えた四人の家族ぐるみの親交については、たとえば埴谷雄高が武田百合子の追悼文の中でこのように紹介している。

ストレプトマイシンとヒドラジッドで、中学以来飼いつづけてきた結核からようやく離れて健康になった私に、さながら、時を合わせるように、武田泰淳は吉祥寺に近い高井戸に三十二年越してきたので、私のところばかりでなく、竹内好、丸山真男、と廻りもちの宴会を開くことになったが、その宴会の「面白い」中心は、奇抜なことを言い、また、する百合子さんで、害虫を噛みつぶした竹内好も、大お喋り学者の丸山真男も、そして武田泰淳自身も、私も家族ぐるみで楽しむ愉悦の無限連続を味わい知ったのは、まさにこの時期である。⁽³⁾

当時近隣に住んでいた四人の「廻りもちの宴会」は、一九六一年一月に武田が赤坂に転居するまで約四年間続けられた模様だが、武田はこの交流についてこう書いている。

高井戸の公団アパートに居住していたころ、さくら咲く井之頭公園のほとりで、四組の夫婦が会合したことがある。おなじ武蔵野に住む、丸山真男、竹内好、埴谷雄高の三夫婦とぼくら。この四組は亭主も女房もたえず往来していたが、八人の男女が正面から顔をそろえて向きあったのは、はじめてだった。銀紙にくるんで蒸したニワトリの足など、われらにとつては豪華なる料亭の食卓の前にして、私は、その場のわざとらしさを打ちやぶるため「まったく、われわれ夫婦はみんな、うまい具合にひつついたもんだなあ。うまく、くつついたもんだなあ」と発言した。・・・私の発言をきくと丸山真男は、いきなりプツと噴き出して笑いころげたのであった。⁽⁴⁾

それに続けて、丸山と知り合った頃を回顧し、

彼と親しくなったのは、伊豆山の岩波別荘に、ほとんど毎月自発的に二人ともカンづめになったためである。仕事をしないで、朝から晩までしゃべりつづけているので、ついには岩波の出版部や『世界』の編集部は、二人の滞在する日時を、すれちがいにさせるにいたった。別荘では、るすばんの中年婦人が、腕によりをかけた日本

料理を出して下さる。しかし私は、丸山がそれらの料理を、うまいとかまずいとか批評したのをきいたことがない。彼は私を「泰淳氏」「和尚」「色即是空」「魑魅魍魎」などと呼び、昭和文士特有のだらしのなさ、頭のわるさをからかいながら、もっぱら学術ならびに学者について紳士的に論じつづけるから、料理や女性、とりわけ友人の女房について論じているひまはない。⁽⁵⁾

それにしても、面と向かった相手に、冗談交じりとはいえ「魑魅魍魎」と呼び掛ける丸山の心事には、親友となる武田に対する無条件の信頼、すべてを飲み込むような茫洋たる個性に対する「甘え」のようなものさえ窺えないだろうか。もともと、武田を「魑魅魍魎」呼ばわ里的なことへの仕返しを丸山は十分に受けたようだ。武田への弔辞の一節からは、丸山の哀惜のこもった切歯扼腕ぶりが窺われる。

しかし泰淳さんとの個人的交友関係については、私はいぶ君に貸しがあるのを君も否定しないでしよう。君の書く文章に、あるいは実名で、あるいは匿名の話相手として、或はモデルとして再三、私は使われました。君の小説のなかに、何とも鼻もちなぬスノッブの大学教授が登場して来る場合、前後の情景から推すと、それは大抵私のことでした。もし私に君ほどの筆力があつたならば、自分をいつも最低の位置に置くことで、いかなる相手に対しても戦略的優位を保つ術を心得た、老獪で小心な坊さん作家を描いてお礼をす

るのに、と幾度くやしがつたことでしよう。顔を合せるごとに、私はこのことで君を詰り、「このつけは必ず届けるよ」とすごんで見たりしました。けれどもいくら文句を並べても、すべては君の茫洋とした笑顔のなかにスルスルと吸い込まれてしまいます。所詮、泰淳さんの悟りの前に私は為すすべを知りませんでした。⁽⁶⁾

ただし、丸山は必要とあれば親友武田に対する忌憚のない批判も惜しんでいない。たとえば「武田泰淳『士魂商才』をめぐって」(一九五九)にはこうある。

「柳は緑花は紅」という考え方が昔から日本にあるわけですね。伝統的には「まあそれぞれいいところがあるさ、やかましいことをいうな」という日本的寛容ですね。自分が確信をもつゆえに、人の確信を尊重する、そういう寛容ではない。日本に入ってきた仏教にはそれが多い。坊主は大体そうだな。⁽⁷⁾

武田泰淳は、文壇への登場がほぼ同時期だったこともあり、三島由紀夫ともその死に至るまで互いに認め合う親交を続けていたことはよく知られている。⁽⁸⁾三島が国家主義的(あるいは幻想的天皇主義?)的な立場を鮮明にするのはこの時よりもかなり後年のことだったとしても、丸山のこの批評には(丸山の目から見れば)無節操とも思える武田の三島との交流をやんわりと非難する意図も込められていたのでは

ないかという想像を禁じ得ない。ちなみに、一九七〇年の「三島事件」について、丸山はコメントを発していない。論評に値しないと考えた可能性もあるが、もしかすれば、三島の親友でもあった武田の心中を慮った結果なのかもしれない。⁽⁹⁾

『丸山眞男集』に収められた丸山の弔辞や追悼記(談話)には、個人の姿を彷彿とさせずにはいない表現と、故人に対する深い真情を吐露した文言で胸を打たれるものが少なくないが、上に挙げた丸山の武田に対する弔辞「泰淳さん、さようなら」(一九七六)もその代表的な一篇と言えよう。

竹内好は、武田のように、丸山との私的な交流を(あけすけに)記した文章は残していないようだ(すくなくとも文業を集成した『竹内好全集』には収められていない)。丸山に触れたものとしては、敗戦後の『日記』には、次のような記述が見られる。

十月十九日(土)『世界』五月号、丸山眞男という人(東大法学部助教授の「超国家主義の論理と心理」よむ。面白かった。近來になく面白かった。帰還後よんだ中で随一のものである。⁽¹⁰⁾

七月十一日(日)……丸山眞男の「日本ファシズム」は予想通り面白い。引例適切、vividにimageがうかぶように述べられている。この人の感覚と、それを支える思想とは、やはり他の人よりきわ立つ

て秀れている。¹¹⁾

さらに、「思想と文学の間」では、丸山の作品の「芸術的完結性」に触れて、このように書いている。

『東大新聞』記者の説によると、丸山真男の『現代政治の思想と行動』は、今日学生の間で、かつての小林秀雄のように読まれているということである。つまり經典化されているということだ。この比喩は、かなりの射ているように思う。丸山が最大の仮想敵にしているのが、ほかならぬ小林秀雄だが、この二人の間にはじつは相似の関係がある。そしてそれを条件づけているものが、両者に共通の強い方法意識と、フィクションへの信仰（同時に断念）である。

おそらくエネルギーを使う丸山の仕事ぶりは、すでに伝説化されているほどだが、文学の立場から見ても重要なのは、そのことではなくて、その結果として出てくる彼の論文の見事な芸術的完結性であろう。賽の河原に石をつむような空しさにたえて、彼は石をつむうとする。その執念が凝って、彼の文章の造型性がうまれる。近代日本の思想家のなかで、彼ほどの作品としての独立性をもった文章を書いた人は少い。

彼の論文は、ボキヤブラリーの差をこえて、たとえば志賀直哉のある種の作品のような、もっと適切にはモーリヤックなどの小説に近いリズム感を読者に与える……

要するに、フィクションは断念の結果であって、それ自体目的ではない。フィクションが自己目的化すればリアリティは失われるという近代文学の原理が、丸山には貫かれている。¹³⁾

丸山が竹内の歿後に「魯迅友の会」の求めで語った追悼の談話（「好さんとのつきあい」一九七八¹⁴⁾）が、終戦後から始まり、六〇年安保で共に闘った時期を経て最後の病床に至る、竹内との三〇年以上にわたる親交についてよく伝えている。

そのほかに、丸山が遺した竹内好についての文章としては「竹内好『日本イデオロギー』」（一九五二¹⁵⁾）、「好さんについての談話」（一九六六¹⁶⁾）、「竹内日記を読む」（一九八二¹⁷⁾）などがあり、また、『丸山真男座談』は、竹内を対話者（の一人）とする座談を最多の七篇収める。武田の場合とは異なり、竹内が、本領である政治思想家・社会思想家としての丸山にとつていかに重要な存在であったのかを示す証左と言える。

木下順二（一九一四—二〇〇六）、森有正（一九二一—七六）

木下と丸山は、同年生まれで、互いに「丸山君」、「木下君」と呼び合う、自他ともに許す親友同士だったようだが（丸山を「日本三大おしゃべり」の一人に認定したのも木下だったという）、自選集である『木下順二集』（岩波書店、一九八八—八九）には二人の交流の発端やその

実際についての記述は見当たらない。戦後間もなく、若手の研究者や作家を集め、総合的な文化運動をめざして結成された「青年文化会議」にともに加わったことが二人の交流の始まりだったようである。

丸山と木下の交流については丸山の「森有正氏の思い出」(一九七九)¹⁸、や「内田義彦君を偲んで」(一九八九)¹⁹に記述がある。また、『丸山眞男座談』は、木下を対話者(の一人)とする座談を五篇収める。

丸山は、木下の作品を主に上演した、山本安英が主宰する「ぶどうの会」の熱心な支持者でもあり、木下作品については、『子午線の祀り』を語る²⁰ (一九八九)や、『沖繩』を論じた「点の軌跡」(一九六三)²⁰がある。

さらに、丸山のよく知られた「日本思想における『執拗低音』」という概念がはじめて提出されたのは、丸山、木下(それに加藤周二)を講演者として行われた、国際基督教大学における連続講演会「日本文化のアーキタイプスを考える」(一九八二)であったことも、丸山と木下の関係を見るうえで示唆的であろう。

木下とは、共に本郷のYMCA寮で「牢名主」的存在であった頃からの無二の親友どうしだった森有正との交友については、上に挙げた「森有正氏の思い出」が委曲を尽くしている。森を「偶像化」することのない森有正論の、おそらくは白眉といってもよい談話と言えるのではないか。だが、木下の場合と同様、『森有正全集』(筑摩書房、一九七八—一九八二)には、「恋人に対するごとき感じ」(丸山自身の表

現)を抱いていたはずの丸山との個人的な交流についての記述はほとんど見られない。

前に挙げた「思い出」によれば、森と丸山が知り合ったのは、一九五〇年頃に東大の学生自治会と大学側との折衝のために作られた「学生委員会」に二人が共に若手教員として委員に選出された時だという。その半年後に森が留学のため渡仏し、所定の年限を経ても帰国せずに職を辞してフランスに留まり続けたため、交流は一旦は途絶えたが、一九六二年、丸山がパリに滞在した折に再開。その後、一九六〇年代末から七〇年代初めにかけて、それ以前に発表されていたものも含めた森の思索的エッセイ群が日本で多くの読者を獲得するようになる。森は定期的に帰国するようになるが、森の丸山に対するほとんど「片恋」のような関係はこのころに始まったと思しい。丸山は、帰国するやいなや「羽田から電話してくる」森の自らに対する過剰なまでの思い入れについて、半ば苦笑を交えながら振り返っている。

この談話は、二人のこのような交流のエピソードから始まり、丸山と森の思考の型や音楽観の根本的な相違に及ぶ本質的な問題を覆っている。『森有正全集』の付録(月報)のための談話という性格上、批判的な言辞こそ慎んではいるものの、森の哲学の中核にある「経験」という概念への評価を留保し、バッハのオルガン曲のみに集中する森の音楽観に疑問を呈し、森が体系的な哲学を構築しえなかったことを惜しむなど、森に対する全面的な共感からはかなり距離を取るものと感じざるをえない。「森さんは、人間としても、思想家としても『謎』に

満ちていますね」という談話の最後の言葉が、森に対する丸山の立場を示唆しているように見える。

加藤周一（一九一九—二〇〇八）

旧制中学、旧制高校、大学とすべて丸山と同窓ではあるが、加藤が五歳の年少であることから、学校時代に丸山と知り合うような機会はなかったであろう。

六〇年安保闘争や六〇年代後半のベトナム反戦運動の中で、さらに、数多い座談会や講演会などを通して、頻繁で密接な接触はあったに違いないが、加藤が欧米の大学に招かれて教授・研究に従う期間が長かったこともあり、たとえば武田や竹内や埴谷との濃密な親交のような形ではなく、互いの存在と仕事に終始深い敬意と信頼を抱き合いながらも、敢えて私生活に渉る付き合いに深く入ることはしない、「水の如き」関係が基調だったのではないかと想像される⁽²¹⁾。

加藤の丸山論としては、「丸山眞男『戦中と戦後の間』」（一九七七）、
「精神の往復運動」（一九九五）⁽²³⁾、「戦後史の中の丸山眞男」（一九九六）⁽²⁴⁾などがあり、丸山の加藤論としては、津田左右吉との対比の中で加藤の『日本文学史序説』の意義を高く評価した「文学史と思想史について」（一九八〇）⁽²⁵⁾がある。これらはすべて、加藤と丸山が深い尊敬と全面的な信頼によって結ばれていたことをよく窺わせるに足る論考と云えよう。

丸山と加藤による共同の仕事としては、『日本近代思想大系』（岩波書店）中の一卷『翻訳の思想』（岩波書店、一九九二）がある。これは、丸山と加藤の共編により、明治初期から中期にかけて、日本の知的社会が、翻訳という手段によって欧米の思想や文学をいかに摂取し骨肉化していったかを、豊富な文献によって跡付けたすぐれたアンソロジーだが、体調不良のため解説文を書くことが困難になった丸山に加藤が意見を求め、加藤の単独執筆となった。この間の丸山との対話をまとめ、丸山の歿後に刊行された『翻訳と日本の近代』（岩波新書、一九九八）が、二人の唯一の共著として残されている。

3. “poeta doctus”, “doctor musicus”

以上のように、丸山が親交を持った文学者たちを通観すると、彼らにある共通性があることが認められるように思う。

仮に表現言語を「文学的・詩的言語」と「認識的・推論的言語」に類型化できるとすれば、彼らはこの二つの言語の相をともに駆使することによって際立っているのではないかという点である。

たとえば武田泰淳には、小説作品のほかに、出世作となった『司馬遷』（一九四三）や評価の高い評論集『人間・文学・歴史』（一九五四）、『政治家の文章』（一九六〇）などがあり、竹内好は中国現代文学の研究者・社会思想家であると同時に、優れた魯迅の翻訳家でもあった。今でも魯迅に親しもうとする読者の圧倒的な多くは、竹内訳に依って

いるのではなからうか。

また、木下順二は、劇作家であると同時に、数多い演劇論の書き手でもあり、またシェイクスピアの翻訳者・研究者でもあった。森有正はパスカル、デカルトを中心としたフランス思想の研究家、哲学者だが、先にも触れた、六〇年代から七〇年代にかけて広く読まれた「思索的エッセイ」は、多くの読者に一種の文学作品として受け止められたのではないかと考えられる。

加藤周一は文学、芸術から社会、政治にわたる多方面の批評家・論者として高名だが、その出発点には、福永武彦や中村真一郎と共に行った「マチネ・ポエティック」の活動があつたことはよく知られている。

仮にこのような文学者のあり方に“poeta doctus”（「学識ある詩人」）という言葉当ててみる。この表現は、古典期には用例が見い出せないように、定評のあるOxford Latin Dictionary (second edition, 2012)にも立項されていない。後代の（主にドイツ語圏で用いられてきた）造語と思われる。本来は「過去の規範的な文学を絶えず意識し、それを範例として作品の中の織り込みながら詩作する詩人⁽²⁶⁾」というほどの意味の言葉で、ある時代までの詩人たちの多くの部分はこの範疇に属したと言ってもよい。一九世紀以降、詩人の独創性が強調される時代になると、この意味が薄れ、文字通り「深い学識に基づいて詩作する詩人」を指す名称に転化していったようである。

親交のあつた文学者たちの活動がこのような表現言語の二つの相に涉っていたように、丸山自身の中にも、政治学者・政治思想家とし

て求められる「認識的・推論的言語」の背後に、「詩的・文学的言語」による表現を求める強い志向があつたのではなからうか、それゆえに丸山は彼らに強い「親和力」(Wahverwandtschaft)を感じ、彼らもそれに応じたのではないかと想像するのは、必ずしも牽強附会に当たらないのではないかと思われる。

その傍証として、たとえば、加藤や竹内が指摘するような、丸山の著述（作品）自体（その文体）の高度の「文学性」が挙げられよう。また、“poeta doctus”（あるいは“doctor poeticus”）と呼ぶのにふさわしい二人の師（南原繁、長谷川如是閑）の存在を思い浮かべてもよいかもしれない。また、丸山が大学入学時に文学部独文科への進学を強く望んでいたことはよく知られている。さらに、友人の文学者たち（武田泰淳、木下順二など）の作品への論評に見られる優れた（文学的な）批評性は、思想家の余技としての水準をはるかに抜くものと言える。これに加えて、オペラなどの多くの声楽曲の英語やドイツ語やフランス語、またイタリア語による歌詞に、丸山が、公開などは全く意識せず、自分自身のためだけに多くの時間を費やして付した流麗で的確な数多い翻訳文（筆者が目にする機会を得たことは幸運であつた）を挙げることもできるだろう。

ただし、丸山は師の南原（『形相』の歌人）や長谷川（多数の小説や戯曲を持つ）のように、文学的言語を駆使した「作品」を残すことには、きわめて禁欲的、抑制的だったように思われる。そして、それに代わってその位置を占め、丸山の中に深く根を降ろしたのが「音楽」

だったのではないかと考えずにはいられない。²⁷ “poeta doctus” に倣って、丸山には “doctor musicus” という名前を呈したい思いにすら駆られる。

丸山の音楽に対する関心は、おそらくは旧制高校的な教養主義の土壌から芽生えたものだったのかもしれないが、丸山の音楽に対する知識と熱意、またそれに費やしたであろう膨大な時間と労力は、単なるハイ・アマチュアとしての教養や趣味の次元を大きく越えている。

そのような丸山にとって、音楽に関するエッセイや論説を執筆し、発表することはとても容易なことだったに違いないが、丸山の音楽に関する（あるいは音楽に言及する）公けにされた文章や談話の数は意外なほどに少ない（手帖の記述や断章を収めた『自己内対話』は、音楽に対する思いをためらうことなく吐露した文章で溢れているのだ）。

その内のいくつかを挙げれば、まず一九四八年の「盛り合わせ音楽会」がある。

これは、一晚のプログラムの中に時代や様式を異にする曲目を詰め込んで平然としている演奏会への違和感から始まって、ラートブルッフが現代の特徴として挙げる「精神的文化の無差別的受容」に伴うニヒリズムにまで及ぶ、長い射程を持つエッセイであり、「上滑りに滑って行く」ような近代日本の宿命的な「強いられた浅薄さ」を指摘する漱石の「現代日本の開化」（一九一一）にも比べられるべきものだろう。

また、「点の軌跡——『沖繩』観劇所感——」（一九六三²⁷）では、アルバ

ン・ベルクのアペラ「ヴォツェック」に言及している。『自己内対話』の中の断章では「本当に美しさが分からない作曲家」の中に「大部分の『現代』作曲家」を挙げていた丸山だが、ロンドンで見たこのオペラには「震えるほど感動した」と言い、「僕に作曲の才能があつたら、『沖繩』は、全部無調のアペラにしたい」とまで述べている。

対談・鼎談としては、吉田秀和との「芸術と政治——クルト・リース『フルトヴェングラー』をめぐって」（一九五九²⁸）のほかに、芦津丈夫、脇圭平との鼎談「フルトヴェングラーをめぐって——音楽・人間・精神の位相——」（一九八三³⁰）（後に『フルトヴェングラー』（岩波新書、一九八四）に所収）がある。丸山はこれにエッセイを寄稿することになっていたが、体調不良のために果たせなかったという。それが実現していれば、丸山が最も傾倒していた演奏家であるフルトヴェングラーを巡る、音楽に関する彼の代表的な論考になっていただろう。

だが、丸山が「殆ど生きることと同様に愛している」とさえ感じていた音楽に関する公の著述や発言が僅かこれのみにとどまったのはなぜなのか。それは、音楽が、丸山のいわば「私的自我」にとってあまりにも重要な部分をなしていたが故に、「社会的自我」の拡大のためにそれを用いることを自らに抑制した（あるいはそれを必要としなかった）からなのではあるまいか。

丸山の楽譜への詳細な書き込み（おそらく演奏時間をはるかに凌駕する時間と労力を要したはずの）も、音楽の体験を単なる受動的な観賞・享受の域に留めず、積極的な主体的・創造的行為に高めるために、

丸山にとって不可欠の、だが、自らの「社会的自我」とは画然と切り離されるべき営みであり、儀式であつたのではないだろうか。

森有正に近かつた人々の中には、バッハのオルガン曲の価値を十二分に認めながらも、森がオルガンの修練のためにあまりに多くの時間を費やしたことを惜しみ、その時間をライフワークである彼の哲学の体系的な構築のために用いなかったことを恨む声があつたと聞くが、森にとつて、バッハは、他の何物で代替することが不可能な、彼の存在自体の欠くことのできない基底をなすものだったに違いない。丸山の周辺にも、彼がスコアと向き合つた膨大な時間の一部なりとも論文や著作の執筆に当てていくれたらと惜しむ思いが必ずやあつたに違いないが、丸山の音楽との関係もこれとまったく同様だったのではないかと思えてならない。

注

本稿は、二〇一四年一月二八日に丸山眞男研究プロジェクト第八回研究会で行つた報告をもとに、若干の加筆を施したものである

- (1) 「文学者」にはやや生硬な語感があり、また、「文士」にはどこか「無頼」の匂いがつきまとうように感じて、あえてアナクロニズムを犯してこの言葉を選んでみた。石川淳などを最後に、現代にはもはや棲息していないであろう種族であることは承知の上である。
- (2) 武田百合子『犬が星見た ロシア紀行』中公文庫、一九八二年、三三八頁。
- (3) 「武田百合子さんのこと」『埴谷雄高全集第十一卷』講談社、一九九九年、六四二―六四三頁。

- (4) 「日本の夫婦」『武田泰淳全集第十五卷』筑摩書房、一九七二年、三頁。
- (5) 同右、四頁。
- (6) 「泰淳さん、さようなら」『丸山眞男集第十卷』岩波書店、一九九六年、二一九頁。
- (7) 『丸山眞男集第八卷』一九九六年、一九頁。
- (8) 武田泰淳は、自らに対する丸山の弔辞にびたりと対応するような、三島由紀夫に対する追悼文を残している（「三島由紀夫の死のちに」『武田泰淳全集第十六卷』一九七二年、四四四―四五〇頁）。
- (9) ちなみに、三島由紀夫は一九六九年の『文化防衛論』の中で「天皇制国家へのルサンチマンに充ちたかのとき」として丸山の「超国家主義の論理と心理」に批判的に言及している。三島が丸山に触れているのは『三島由紀夫全集』（旧版、一九七三―一九七七）の中で、この箇所を含めておそらく二か所のみ。
- (10) 『竹内好全集第十五卷 日記（上）』筑摩書房、一九八一年、三一頁。
- (11) 同右、四三七頁。
- (12) 『竹内好全集第十二卷 作家について・書物について』一九八一年、三二九―三三〇頁。
- (13) 『丸山眞男集第十卷』一九九六年、三四九―三六一頁。
- (14) 『丸山眞男集第五卷』一九九五年、二四九―二五一頁。
- (15) 『丸山眞男集第九卷』一九九六年、三三七―三四〇頁。
- (16) 『丸山眞男集第十二卷』一九九六年、二五―三九頁。
- (17) 『丸山眞男集第十一卷』一九九六年、七九―一一〇頁。
- (18) 『丸山眞男集第十五卷』一九九六年、七七―八七頁。
- (19) 『丸山眞男集第九卷』一三一一―一四四頁。
- (20) 『丸山眞男集第十五卷』三七―五六頁。
- (21) ただし、丸山が加藤と親密な時を過ごす機会もまれにはあつたようだ。丸山の旅人としての一面を紹介した加藤の小文では、丸山との信州旅行のエピソードが印象深く回想されている（高原好日（2）丸山眞男『加藤周一 自選集第十卷』岩波書店、二〇一〇年、一二四―一二八頁）

- (22) 『加藤周一自選集第六卷』二〇一〇年、一一―一九頁
- (23) 『加藤周一自選集第九卷』二〇一〇年、一五二―一五九頁
- (24) 同右、二四九―二五二頁。
- (25) 『丸山眞男集第十一卷』三三三―三四〇頁。
- (26) Das große Wörterbuch der deutschen Sprache (1. Auflage, Bibliographisches Institut, 1976-1981) の該当項目に於て。
- (27) 『丸山眞男集第三卷』一九九五年、三三五―三四三頁。
- (28) 『自己内対話』みすず書房、一九九八年、二六三頁。
- (29) 『丸山眞男座談第三卷』岩波書店、一九九八年、二三五―二五七頁。
- (30) 『丸山眞男座談第九卷』一九九八年、一―六四頁。